

安国良一氏口頭報告「錢からみた近世初期貨幣史の課題」へのコメント

千枝大志（皇學館大学大学院博士後期課程）

1) 安国氏報告の論点の紹介と整理

今回の安国氏の報告は、一貫して近世貨幣流通史などを主導されてきた氏の近世初期貨幣史の最新の研究成果と今後の当該期貨幣史研究全体への提言ともいえるもので論点も多岐にわたる。氏の成果と提言については、評者は、現在まで中近世移行期の貨幣流通の地域実態解明を伊勢国を事例に検討しており、これまでの氏の成果も含めて今後の自らの研究に非常に有益なものとして評価し、今後の自説の展開にもその成果をできるだけ組み込んで行きたいと考えている。

実は、評者としては、今までは上記のように中世末期における貨幣の地域実態の解明を主眼としてきており、近世初期の貨幣実態についてあまり深く検討したことがなかった。また、対象地域が、一大権門である伊勢神宮周辺の神宮領（直接支配地域で、文禄3年から検地免除地）であるという特殊な地域（中世的構造が近世まで残存する地域）であったため、残存史料の性格上、中・近世の武家支配階層の貨幣政策やその影響を明瞭に読み取り持論を展開することを半ば放棄していたところがあった。そのため、氏の卓越した視点（特に藩幕との問題）を十分に評する力量は、持ち合わせていないに等しい。

しかし、今回の貴重なコメントする機会を得るにあたって、初めてそれに取り組むきっかけや指針を得ることができた。そのため、氏の多岐の論点を十分に評せるか否かは心もとないが今後の自分自身の課題を設定するためにも、敢えて今回の課題に取り組んでいきたいと思っている。その点、予めご寛容いただけたら幸甚である。

まずは、氏の示された多岐の論点を自分なりに順に紹介する。

はじめに

近年の急激な貨幣史の進展

中世貨幣史→かなり具体的レベルで解明

- ①中近世移行期の錢貨流通の地域性
- ②撰錢令発布の背景や影響
- ③米の貨幣的使用
- ④金銀の貨幣的普及

◎それをうけての安国氏の視点

- ①の貨幣の地域性に限定すると近世前期の領国貨幣研究の成果へ連結していく感があるが、近世における貨幣の統一（統合）の実態や意味が問い直されつつあるため、寛永通宝以前に貨幣統合の段階を措定し、その内実と今後の課題を提示

I 近世初期の撰錢令

純然たる貨幣政策の範疇でこの時期の法令を理解すること

→評価を誤らせる 同時に出された別法令や歴史的状況とともに理解すべき

多くは幕府・交通政策の一環として発布したことに特色

→幕府の主関心は街道筋の錢貨の使用事情

II 鑊錢=京錢による錢貨統合の段階

- ・ 京錢の定義 各先行研究者の定義を整理
- ・ 領国貨幣 秋田・水戸・長門・小倉ほか九州諸領国 ※特に秋田藩の事例を検討
- ・ 錢をめぐる幕藩関係 街道筋の支払い手段としての錢
独自の貨幣流通を可能とする大名の公権が対幕関係上で動揺。京錢の機能上の限界
- ・ 京錢の鑄造地の新たな推定地の提唱
推定供給地→近江国坂本 近江名物「錢鑄形土」とアユタヤでの良錢「サカモト」
- ・ 京錢勘定の残存 江戸期の一貫した諸役賦課単位としての京錢
- ・ 朝鮮通信使の見聞 (慶長 12・元和 3・寛永 1) 街道筋の貨幣経済の浸透を好評

◎京錢優位期→慶長 13～寛永 13 領国錢を許容したまま、藩際通貨として普及。金銀を含め幕府の相対的優位のもので、個別領主の独自通貨圏を認めながら比較的緩い統合を示す。

※生産・流通における朱印船貿易家との関係解明を課題とする

III 寛永通宝前夜

- ・ 流通貨幣の全国調査 長州藩の事例→京錢に比して軽薄な領国錢使用を明言
- ・ 幕府の旧来流通錢の買上げ フランソア・カロンの記述

おわりに

- ・ 寛永通宝発行の評価

A 中世経済発展の成果 B 近世日本国家意識の表れ→これらの見方が交錯

◎鑊錢範疇による錢貨統合という点では、京錢の時代こそが既にその達成段階とする

大名独自の貨幣圏の存在を前提としても後藤金・常是銀・京錢の通用力は十分機能した

◎次段階への推進要因

- ① 対外交易の制限と連動した内外貨幣の区分、
- ② 偽造防止と関連した金属流通と職人統制
- ③ 国家意識

2) 安国氏報告へのコメント

- ・ 特徴と成果

- ① 領国貨幣のそれぞれの地域実態を確認し明確化
 - ② 鑊錢(京錢)の使用優位時期を特定し、幕府指定の基準通貨として評価。→各幕府鑄造貨幣(金銀錢)の優位性状況下で独自の通貨圏を認めつつ緩やかな統合がなされたことを卓越に論証
 - ③ 海外史料上を用いての当該期の錢貨の生産流通実態や政策を解明 特に京錢供給地推定は白眉
- ・ 若干の質疑 (特に氏の報告題目には課題が掲げられているため、その部分でのコメント)

①安国氏は主として幕藩関係史料といういわば、権力側の史料を用いて当該期の貨幣の動向や政策、さらには各種の領国貨幣の実態を明らかにされているが、政策等のレベルでの説明には有益であるが、各種の領国貨幣の実態描写にはやはりもっと積極的に庶民レベルの史料（特に氏の強調される街道筋）をも組み合わせた検討が必要なのではないか？ 若干氏の報告した時代から下るが、本報告の表①（伊勢）と安国氏の提示された表④（京都）を比較すると、寛永銭と銀との交換相場は殆ど京都と伊勢は差が無い。→当該期の貨幣実態の描写には各地域の庶民史料は不可欠

※なお、表①は外宮齋館である外宮子良館の同館に収められた賽銭の実態（寛永末慶安初期）を示す。豊富な流通量を誇る新銭（寛永銭）・徐々に市場から駆逐される古銭（旧来銭）・少量ながら独自の動き（年末の賽銭額の増加）をみせる悪銭である鉄銭（鉄製悪貨模造銭？）の3種の銭が確認
各銭貨価値比率は年々徐々変化 3銭（新銭・古銭・鉄銭）から2銭（新銭・古銭と鉄銭）へ統合をみせるが、当該期の内宮地区の記録『宇治土公家引付』（『続群書類従』）正保4年卯月20日条では「時ハヤリ銭上々参貫八百文」とあり、庶民は寛永通宝発行後も通貨の不安定さを感じており、それは金などでも同様である。

また、前回の田中浩司氏の提言（中世京都撰銭の銭名と実際の流通銭貨名の乖離）や本報告（特に図表）を参照すれば、領主側の銭名と庶民側の銭名には、差がみられることも想定でき、より実態説明にむけての課題としては新たな庶民史料（特に街道筋以外）の利用も考慮すべきでは？

※街道筋以外の銭貨流通の問題はどうであろうか？ 港湾・農村・都市・山村など

②京銭=びた銭という理解には、近年、中世史側（本多博之氏「南京銭と鍛（ちゃん）」（『出土銭貨』15）・前回の中島圭一氏報告）から疑問（特に中世と近世との差）があるがどう理解されるか？

③寛永通宝発行後の動向はどうであろうか？

④中世との接続を考える上で慶長期の問題は今後の議論を深める必要性を痛感するがその点は？

とりわけ、同時期の海外史料は『日葡辞書』などの貨幣史料としても有益な史料も存在

※『日葡辞書』の一例として 一文の説明には「Ichimon（イチモン） 金、銀、銅、または、その他の金風で作った貨幣で作った貨幣の数え方」とあり、大黒天の説明にも「Daicocu（ダイコク）」その1「ある種の銀貨に打ってある刻印」その2「富・福の神（Cami）、また、この神（Cami）の形の印、または、刻印が打ってある或る銀貨の名」とあるなど日本側史料では判らない貨幣実態がかかれており貴重。

⑤近江名物「銭鑄形土」とアユタヤの「サカモト」と豊臣期近江長浜の新銭鑄造停止令との関係は？

⑥当該期の金銀の流通実態（特に丁銀は私札の問題に関わる）

◎以上の5点を安国氏への質疑として提示させてもらったが、質疑というよりは個人的な質問や興味からのものである感は否めなく、的外れな質問だらけかもしれないがその点は何卒ご寛容いただければと思う。

※主要参考文献

安国良一氏「近世撰銭令をめぐって」（『越境する貨幣』青木書店 1999）

同氏「三貨制度の成立」（『銭貨—前近代日本の貨幣と国家—』青木書店 2001）

拙稿「伊勢『大湊古文書』に見られる銭貨記載についての基礎的考察」（『第三十七回 日本古文書学会研究発表要旨』及び、配布レジュメ 2004/10/03 於筑波大学大学会館国際会議室）

		12下	500	700	1400	7	1000	200	200	1	50	50	1000	5
		12下	1800	2520	1400	7	3000	600	200	1			#DIV/0!	#DIV/0!
慶安2	1649	1下	1730	2465	1424.855491	7.124277457	200	40	200	1	20	20	1000	5
		2下	2170	3500	1612.903226	8.064516129	100	20	200	1	35	40	1142.857143	5.714285714
		3下	5300	7685	1450	5.8	200	50	250	1	60	60	1000	4
		4下	1920	2780	1447.916667	6.515625	450	100	222.2222222	1	10	12	1200	5.4
		5下	1310	1885	1438.931298	7.194656489	300	60	200	1	12	13	1083.333333	5.416666667
		6中	2960	4450	1503.378378	6.013513514	400	100	250	1	70	100	1428.571429	5.714285714
		7上	800	1200	1500	6	100	25	250	1	10	12	1200	4.8
		11下	400		0	#DIV/0!			#DIV/0!	1			#DIV/0!	#DIV/0!
		12下	200	320	1600	7.272727273	2500	550	220	1	40		0	0
慶安3	1650	12下	1360	2130	1566.176471	#DIV/0!			#DIV/0!	1			#DIV/0!	#DIV/0!
		1下	1600		0	#DIV/0!	200		0	1	30		0	#DIV/0!
		2下	1500	2400	1600	6.4	100	25	250	1	10	10	1000	4
		3下	7300	11680	1600	5.333333333	300	90	300	1	100	110	1100	3.666666667
		4下	3050	4080	1337.704918	4.459016393	100	30	300	1	50	50	1000	3.333333333
		5下	916	1460	1593.886463	3.984716157	100	40	400	1	30	30	1000	2.5
		6中	3640		0	#DIV/0!	200		0	1	44		0	#DIV/0!
		7下	850	1360	1600	4.571428571	200	70	350	1	20	20	1000	2.857142857
		9下	3800	6080	1600	4.8	30	10	333.3333333	1	60	30	500	1.5
		10下	560	900	1607.142857	#DIV/0!			#DIV/0!	1	10	10	1000	#DIV/0!
		12?	? 3215	4890	1520.995334	#DIV/0!			#DIV/0!	1	50	50	1000	#DIV/0!
		12?	?		#DIV/0!	#DIV/0!			#DIV/0!	1	45	50	1111.111111	#DIV/0!
慶安4	1651	1下	1800	3025	1680.555556	4.201388889	100	40	400	1			#DIV/0!	#DIV/0!
		12下	140	215	1535.714286	#DIV/0!			#DIV/0!	1			#DIV/0!	#DIV/0!
		12?	1800	2970	1650	4.125	1800	720	400	1			#DIV/0!	#DIV/0!
		6?	1350		0	#DIV/0!			#DIV/0!	1	40		0	#DIV/0!

※ 外宮子良館関係史料(「寛永廿年館籠帳」「慶安年中之記」神宮文庫蔵)より作成

表①-B 各銭貨巻真文分の銀

年代	西暦	銭1貫文分の銀(匁)	銭貨名	備考	出典
永禄10	1567	4	国銭	為替(肥前~伊勢)	①野田耕一郎氏所蔵文書
永禄11	1568	25	清銭(精銭)	為替(肥前~伊勢)	①野田耕一郎氏所蔵文書
元龜3	1572	30	記載無(精銭?)	為替(肥前~伊勢)	①野田耕一郎氏所蔵文書
元龜4	1573	30	記載無(精銭?)	為替(肥前~伊勢)	①野田耕一郎氏所蔵文書
天正17	1589	12	(びた銭)	相場	②松原旧記
慶長9	1604	9	びた銭		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
慶長9~10	1604~5	11.1	びた銭		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
慶長9~11	1604~6	10.1	びた銭		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
慶長11	1606	11.5	びた銭		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
慶長11	1606	11.5	記載無(びた銭?)		④慶光院文書
慶長12	1607	12.5	記載無(びた銭?)		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
慶長13	1608	16	びた銭		③退蔵文庫旧蔵神宮関係古文書
元和5	1619	15	記載無		⑤冠下日記
寛永4	1627	38	永楽500+薄銭500		⑥外宮子良館日記

※1 ①個人蔵(宮後三頭大夫文書)
 ※2 ②・⑥神宮文庫蔵
 ※3 ③・④「三重県史 中世1下」所収
 ※4 ⑤村田氏美「二季叢書」所収

③表 永楽銭と他の貨幣との比率
(黒橋での散取量の比率、単位：倍、但し銭は一貫文、金は一枚分の米の量での比較)

年号	水楽銭	水・薄合銭	薄銭	銅銭	金	備考
元龜4年	1	0.9166666	0.8333333	0.1391666		(天正元年)
天正2年	1	0.9166666	0.8333333	0.1391666		
天正3年	1	0.9166666	0.8333333	0.1391666		この年は量の量での比較
天正4年	1	0.9166666	0.8333333	0.1391666		
天正5年	1	0.9166666	0.8333333	0.1391666		
天正6年	1	0.75	0.5		22.5	金と水楽銭は運動(仮)
天正7年	1	0.6986636	0.3977272			金と水楽銭は運動(正式採用)
天正8年	1	0.7272727	0.4545454		22.727272	
天正9年	1	0.7485795	0.497159		22.727272	
天正10年	1	0.6729249	0.3458498		22.727272	
天正11年	1	0.8458498	0.6916996		22.727272	
天正12年	1	0.8977272	0.7954545		22.727272	
天正15年	1	0.6986636	0.3977272		22.727272	
天正17年	1	0.644628	0.2892561	0.3057851	22.727272	
慶長7年	1	0.6714005	0.3428011		16.160626	(判折)
慶長7年	1	0.7410468	0.4820936		22.727272	(黒橋)
慶長8年	1	0.6986636	0.3977272		22.727272	

(*慶長7年の水楽銭と水・薄合銭の倍率については、判折を利用しての、黒橋だけで、算出した倍率も記した。なお、これらの比率は各年の水楽銭1貫文分の米の量を1とした場合のものであり、小数点第7位以降は省略。)

(千枝 1999)

②表 各貨幣で交換できる米の量

(黒橋での散取量、単位：米・合、但し、銭は一貫文、金は一枚分の米の量)

年号	水楽銭①(A)	水・薄合銭②	薄銭③(B)	金④	銅銭⑤	備考
元龜4年	1200(600)	1100	1000(500)	不明	[167]	天正元年(一五七三)
天正2年	1200(600)	1100	1000(500)	不明	[167]	
天正3年	1200(600)	1100	1000(500)	不明	[167]	この年は量での交換量
天正4年	1200(600)	1100	1000(500)	不明	[167]	(元龜3年から慶長7年の量は一貫文)
天正5年	1200(600)	1100	1000(500)	不明	167	慶長での量は割川神事以外から多く
天正6年	2000(1000)	1500	1000(500)	45000	不明	この年以降は両隣相場にまづく。
天正7年	1760(880)	1230	700(350)	40000	不明	
天正8年	1540(770)	1120	700(350)	35000	不明	
天正9年	1408(704)	1054	700(350)	32000	不明	
天正10年	2024(1012)	1362	700(350)	46000	不明	
天正11年	1012(506)	856	700(350)	23000	不明	
天正12年	880(440)	790	700(350)	20000	不明	
天正15年	[1760(880)]	[1230]	[700(350)]	40000	不明	金での量は割川神事以外から多く
天正17年	2420(1210)	1560	700(350)	[55000]	740	
慶長7年	[1452(726)]	[1076]	[700(350)]	[33000]	不明	黒橋だけの散取量
慶長7年	2042(1021)	1371	700(350)	33000	不明	水楽銭は黒橋、薄銭は判折での量
慶長8年	1760(880)	1230	700(350)	40000	不明	水楽銭500文は判折で123合に相当

(*AとBは史料の記載からの数量、計算式：A×2=①、B×2=③、A+B=②、慶長7年の水楽銭500文分の米の散取量は判折での散取量しか記載されていない為、黒橋だけの散取量も記載した。〔 〕付の数量は史料に記載がないが算き出せる散取量である。元龜4～天正4年の慶長での交換量は大湊古文書から算出したものである。)

(千枝 1999)

④表 金1枚分の各銭貨の金額

年代(西暦)	金1枚(10両)分の銭(文)	銭貨名	備考	出典
永祿12～天正6頃(1569～1578)	200000	びた銭	200000文代(推定計算値)	外宮子良徳日記・土田家古文書
天正6(1578)	155000	びた銭	戊午	土田家古文書
天正6(1578)	22500	永楽銭		外宮子良徳日記
天正7～慶長8(1579～1603)	22727	永楽銭		外宮子良徳日記
天正12(1584)	20000	清銭		引付控残巻 拾六年迄之事
天正12～13(1584～85)	64000	びた銭		遠敷文庫旧版神宮証候古文書
天正13頃(1585)	58512	びた銭		遠敷文庫旧版神宮証候古文書
天正16(1588)	66667	びた銭		外宮子良徳日記
天正16(1588)	16667	—	基準銭	外宮子良徳日記
天正17(1589)	74324	びた銭		外宮子良徳日記
慶長9(1604)	20000	本銭		原光殿文書
慶長9(1604)	55556	びた銭	判金	原光殿文書・遠敷文庫旧版神宮証候古文書
慶長13(1608)	20000	(本銭)		遠敷文庫旧版神宮証候古文書

表⑤ 永楽と他の貨幣との比率 その2

天正6(1578)	永楽1:びた銭6.9
天正12(1584)	永楽1:びた銭2.82
天正13(1585)	永楽1:びた銭2.57
天正16(1588)	永楽1:びた銭2.93
天正16(1588)	永楽1:基準銭0.73
天正17(1589)	永楽1:びた銭3.27
慶長9(1608)	永楽1:本銭0.88
慶長9(1608)	永楽1:びた銭2.44
慶長13(1608)	永楽1:本銭0.88

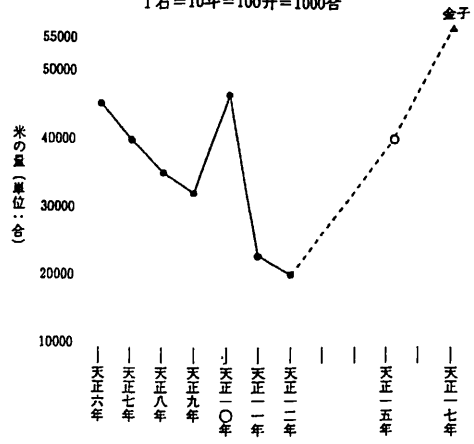
⑤表 大湊関係史料にみえる銭貨の種類

銭貨名	1569	1572	1573	1574	1575	1576	1577	1578	1579	1580	1581	1582	1583	1584	1585	1586	1587	1588	1589	1604	1608	
元龜4年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正2年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正3年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正4年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正5年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正6年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正7年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正8年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正9年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正10年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正11年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正12年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正15年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
天正17年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
慶長7年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
慶長8年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
慶長9年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
慶長13年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

* 凡例
○—直銭期で「永祿3年記」と同名で同種の銭貨を示す
△—「永祿3年記」と同名であるが同種の銭貨が不明
□—「永祿3年記」と同名であるが別の銭貨を示す
永祿元年(1568)・元龜元年(1670)・天正元年(1573)

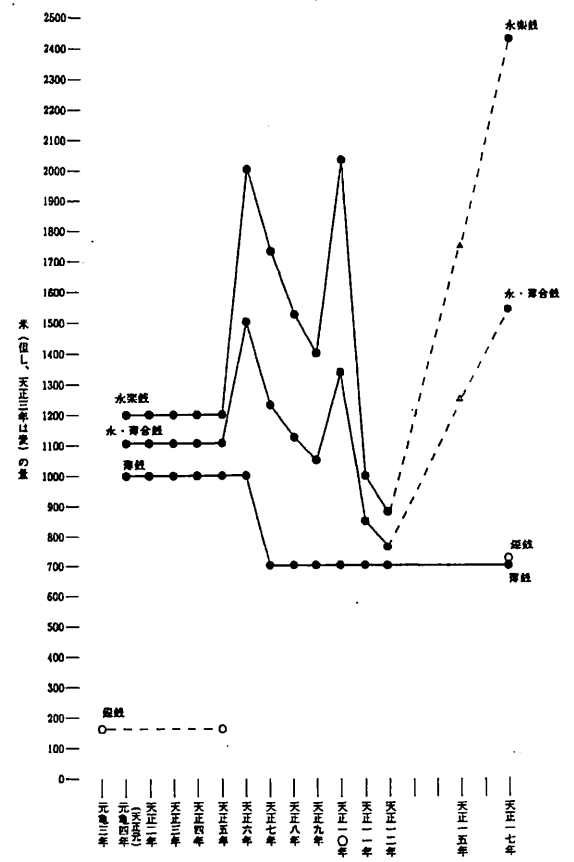
①-1 図 「外宮子良館日記」に見られる
各貨幣の変動を示したグラフ

金子1枚で交換できる米の量 (慶長7・8年は省略)
1石=10斗=100升=1000合



(千枝 1999)

①-2 図 各銭1貫文で交換できる米(但し、天正3年は変)の量 (慶長7・8年は省略)
1石=10斗=100升=1000合



(千枝 1999)

② 中世末期伊勢神宮周辺地域(※大湊も含)における各銭貨価値序列試算図 (永禄後~天正後期頃 1560~80年代)

銭貨名	精銭(精銭)	永楽銭	薄銭	中銭	古銭	びた銭	へいら銭	悪銭
永楽銭貫文同価値(文)	(889)	1000	(1200)	1500 (2240)	3333	8000	10429 (16200)	16120
価値序列試算(第一低)	(☆)	☆☆	(☆)	(☆)	☆☆	☆☆	☆☆	☆☆

